

1. あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、
2. あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と言っても、
3. その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。
4. あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。
5. その預言者、あるいは、夢見る者は殺されなければならない。その者は、あなたがたをエジプトの国から連れ出し、奴隷の家から贖い出された、あなたがたの神、主に、あなたがたを反逆させようとそそのかし、あなたの神、主があなたに歩めと命じた道から、あなたを迷い出させようとするからである。あなたがたのうちからこの悪を除き去りなさい。
6. あなたと母を同じくするあなたの兄弟、あるいはあなたの息子、娘、またはあなたの愛妻、またはあなたの無二の親友が、ひそかにあなたをそそのかして、「さあ、ほかの神々に仕えよう。」と言うかもしれない。これは、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった神々で、
7. 地の果てから果てまで、あなたの近くにいる、あるいはあなたから遠く離れている、あなたがたの回りの国々の民の神である。
8. あなたは、そういう者に同意したり、耳を貸したりしてはならない。このような者にあわれみをかけたり、同情したり、彼をかばったりしてはならない。
9. 必ず彼を殺さなければならない。彼を殺すには、まず、あなたが彼に手を下し、その後、民がみな、その手を下すようにしなさい。
10. 彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない。彼は、エジプトの地、奴隷の家からあなたを連れ出したあなたの神、主から、あなたを迷い出させようとしたからである。
11. イスラエルはみな、聞いて恐れ、重ねてこのような悪を、あなたがたのうちで行なわないであろう。
12. もし、あなたの神、主があなたに与えて住ませる町の一つで、
13. よこしまな者たちが、あなたがたのうちから出て、「さあ、あなたがたの知らなかったほかの神々に仕えよう。」と言って、町の住民を迷わせたとき聞いたなら、
14. あなたは、調べ、探り、よく問いたださなければならない。もし、そのような忌みきらうべきことがあなたがたのうちで行なわれたことが、事実で確かなら、
15. あなたは必ず、その町の住民を剣の刃で打たなければならない。その町とそこにいるすべての者、その家畜も、剣の刃で聖絶しなさい。
16. そのすべての略奪物を広場の中央に集め、その町と略奪物のすべてを、あなたの神、主への焼き尽くすいけにえとして、火で焼かなければならない。その町は永久に廃墟となり、再建されることはない。
17. この聖絶のものは何一つ自分のものにしてはならない。主が燃える怒りをおさめ、あなたにあわれみを施し、あなたをいつくしみ、あなたの先祖たちに誓ったとおりに、あなたをふやすためである。
18. あなたは、必ずあなたの神、主の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じるすべての主の命令を守り、

あなたの神、主が正しいと見られることを行なわなければならない。

## 説教

申命記 13 章では、カナンに入ったら必ず直面するであろう偶像崇拝の様々な誘惑にどう対処するかを、モーセが教えています。これもまた 12 章に続いて、「神を愛する」戒めである十戒の第一戒と二戒の具体的な定めです。13 章の 1-5 節は、以前一度説教しましたが、今日は 13 章全体を学びます。

まず、直接啓示を受けたと言う者が、偶像崇拝へと誘惑する場合について教えられます。「あなたがたのうちに預言者または夢見る者が現われ、あなたに何かのしるしや不思議を示し、あなたに告げたそのしるしと不思議が実現して、『さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。』と言っても、その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない。」(1-2)

「夢見る者」は、視覚に訴えた直接啓示を見る者のことです。「預言者」は、文字通り本物の預言者のことではなく、お告げのような、聴覚に訴えた直接啓示を受ける者のことです。こうした幻を見たり、声を聞いて、直接啓示を受けたと言う者が、自分が神憑っていることを証明する「何かのしるしや不思議を示し」、のみならず、その直接啓示の「お告げ」が、その通りに実現したとしても、その直接啓示を受けたという者が、神に背くよう誘惑するならば、「その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない」と律法は命じます(3)。

“夢や幻を見た”とか“神の声を聞いた”と言えば、何か生き生きと神秘的で霊的なもののように思えます。直接啓示と言えば、青森なら“いたこ”、沖縄なら“ユタ”、韓国には“ムーダン”があり、こうした土着の“霊媒師”“生き神”の存在は、民衆の信頼を得て根強いものです。そして、今現在、キリスト教の仮面をかぶった土着の神秘主義の異端が、キリスト教会にも侵入しているのは周知の通りです。

イスラエルがカナンに入ると、今度はカナン土着の偽「預言者」や「夢見る者」といった、怪しい神秘主義と対面することになります。直接啓示自体は、聖書で必ずしも全面的に禁じられているものではありませんが、問題は、彼らがそうした直接啓示と「何かのしるしや不思議」で人々の信頼を得ながら、「さあ、あなたが知らなかったほかの神々に従い、これに仕えよう。」と偶像崇拝へと誘惑することです。超常現象で人々をあっと驚かせ、恐れさせて、偶像崇拝をするよう惑わすのです。ある意味で、最も原始的な手法というか、神秘的なものに惑わされやすい人間の心理を利用した、極めてあくどいやり方です。

これに対して、モーセは、「その預言者、夢見る者のことばに従ってはならない」と命じます(3)。そして、こう解説するのです。「あなたがたの神、主は、あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうかを知るために、あなたがたを試みておられるからである。あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。」

(3-4) つまり、何より大切なことは、あくまで「主を愛」し、「主に従って」、「主の命令を守る」ことなのであって、直接啓示など、要するにどうでもいいのです。むしろ、直接啓示を受けたと自称しているその神秘主義者は、人々を惑わす危険性があるので、彼らのパフォーマンスではなく、その言っている内容に注目せよと言います。

そして、言っている内容が、律法に反して明らかにおかしければ、「その預言者、あるいは、夢見る者は殺されなければならない」と厳しく死刑を命じます。そうして、「あなたがたのうちからこの悪を除き去れ（「徹底して破壊しろ、焼き尽くせ」の意味）」と命じるのでした(5)。

このように、どんなにすばらしい夢や幻を見ても、あるいは、どんなに神秘的な神の声らしきものを聞いたとし

でも、それ自体は何の価値もありません。むしろ、そのような神秘的な現象は、神が私たちの実体を知るための「試す（試験する）」道具に過ぎません。すなわち、私たちが「心を尽くし、精神を尽くして、本当に神を愛するかどうかを知るため」の試金石です。肝心なのは、「あなたがたが心を尽くし、精神を尽くして、ほんとうに、あなたがたの神、主を愛するかどうか」です。「あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければ」なりません。「主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければ」なりません(4)。

「夢」にしても「声」にしても、神秘体験や直接啓示は、すべて聖書から吟味しなければなりません。神と人を愛することを命じる「律法」を基準に、正しく解釈し直されなければならないのです。そして、どんなにすばらしい直接啓示を体験しても、たとえ天国を直接この目で見たとしても、その結論が「律法」を守ることと全く関係なく、むしろ「律法」に背くことを言うならば、「その預言者、夢見る者のことば」に従ってはなりません。神のことばをないがしろにする「この悪」を徹底的に除き去らなければなりません。

初代教会の時代から、異端は、聖書に自分たちの言いたいことを付け加えたり、都合の悪い内容を聖書から取り除いて、自分勝手な偽のキリスト教をでっち上げてきました。神の啓示は、旧新約聖書 66 巻で完結しています。それなのに、これだけでは不十分とばかりに、都合の悪い所を取り除いたり、勝手に付け加えます。神秘主義の異端の場合、聖書では不十分とばかりに、自分たちの聞いた「声」や「幻」を付け加えるのです。しかし、これにどんな言葉を付け加えても、取り除いても、必ず神の呪いを受けます。申命記 13 章では死刑が命じられていますが、黙示録を見ると、人々を惑わした偽預言者（異端）は、世の終わりに、「硫黄の燃える火の池」、すなわち地獄に投げ入れられて、そこで「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」こととなります（黙示録 20:10）。ちなみに、イスラエルを惑わして偶像崇拜の罪を犯させた古い師バラムは、イスラエルに処刑され（ヨシュア 13:22）、同じく偽預言でイスラエルを惑わしていたバアルの預言者たちは、エリヤによって処刑されました（I 列王記 18:40）。

6 節からは、「兄弟」、「息子、娘」、「あなたの愛妻」、「無二の親友」といった親しい家族や友人が、同じように、「さあ、他の神々に仕えよう」と「そそのかす」誘惑が挙げられています。彼らは偽預言者のようにカリスマ性があるわけではありません。でも、最も身近で、足もとから、ささやくように、偶像崇拜の罪へと誘惑するので手強いのです。しかも、一見もつともらしく、情に訴えて、「悪いことは言わない、これもお前のことを思っただ」とか「私たちのことも考えて」と言って説得してきます。

戦時下、日本による神社参拝の強制がなされた時、抵抗して投獄された多くの牧師は、妻や母親に泣きつかれてさすがにたまらず棄教しました。牧師夫人たちは、たいてい面会に来ると、「ヨボ（あなた）、あなただけが神社参拝しないでいたらどうなるの？子どもたちはみな、神社参拝する学校に行って、神社参拝しながら勉強しているというのに、その上あなたがこんなでいたら、私たちはどうやって生きていくというの？」と夫に説得したため、ほとんどの牧師は気が挫けて降伏しました。ある牧師は、一度は神社参拝を拒否して投獄されたものの、面会に来た母親に「おまえ、こんなにしておまえ一人死んだって、それが一体何の勝利だっていうの？おまえは若いんだから、出所して働かなきゃ！留置場で死んだって何の得があるの？」と説得されて背教しました。

ユダヤ人は、どの民族よりも自分の家族を大切にしました。でも、どんなに家族が大切であったとしても、神より優先してはならないのです。人に従うより神に従うべきです。

偶像崇拜に誘惑する家族への対処は、極めて厳しく命じられます。「あなたは、そういう者に同意したり、耳を貸したりしてはならない。このような者に憐れみをかけたり、同情したり、彼をかばったりしてはならない。」(8)そして、「必ず彼を殺さなければならない。…彼を石で打ちなさい。彼は死ななければならない」と命じられるのですから、何とも厳しい限りです(9-10)。勿論、今日私たちキリスト者は、焼香をするよう迫る家族を石打ちにするようなことはしません。でも、偶像崇拜が永遠の死に価する罪悪であることを決して忘れてはなりません。

最後に、世俗の指導者からの偶像崇拜の誘惑について教えられます。悪魔は、あの手この手で神の民を罪へと誘惑するものだと思いますが、これはまた、これまでの二つの誘惑とは違って、大がかりなものです。「もし、あなたの神、主があなたに与えて住まわせる町の一つで、よこしまな者たちが、あなたがたのうちから出て、『さあ、あなたがたの知らなかったほかの神々に仕えよう。』と言って、町の住民を迷わせたと言ったなら、あなたは、調べ、探り、よく問いたださなければならない。」(12-14) 「よこしまな者たち」とは、要するに「神を知らぬ世俗の指導者」を意味します。つまり、神を知らぬ世俗の為政者が、国民を惑わして偶像崇拜を迫るのです。戦時下の神社参拝強制や戦後の「日の丸・君が代」強制のように、この種のもは、神秘性で惑わす偽預言者や情に訴える家族とは異なり、大がかりで組織的に狡賢く欺すので、よくよく「調べ」てみなければ、それとは気付きません。

そして、「そのような忌みきらうべきことがあなたがたのうちで行なわれたことが、事実で確かなら、あなたは必ず、その町の住民を剣の刃で打たなければならない。」と、町をまるごと滅ぼすよう命じられます。16-17 節では、その際、略奪品には手をつけぬよう命じられています。世俗の権力者たちが多くの私財を持っていたので、それを見て、思わず手をつけたくるという誘惑があったためと思われる。彼らは、国民に偶像崇拜を強要して絶対服従を誓わせながら、不正な侵略戦争を繰り返し、そうして、その背後で私腹を肥やして、多くの不正な略奪品をじっくりため込んでいた様子が見て取れます。12 章でも、人間が欲の実現のために平気で人を犠牲にし、食いものにするということを読みましたが、結局、偶像宗教の本質は、人間中心、人間のエゴ、欲望、欲心、人の欲の実現に他ならないのです。昔も今も、パレスチナでも日本でも、共通する権力者の浅ましい姿と言うべきでしょうか。

悪魔の惑わしに打ち勝ちましょう。「あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れなければならない。主の命令を守り、御声に聞き従い、主に仕え、主にすがらなければならない。」(4) 私たちが「聞く」べきは、「あなたがたの神、主」のみことばです。私たちが「従う」べきは、「主の命令」、主の「御声」です。私たちが「すがらなければならない」のは、「主」なのです。「夢見る者」でも「身内」でもありません。ましてや、神を知らぬ世俗の権力者でもありません。彼らは「よこしまな者たち」です。偶像崇拜を強要します。最も大きな罪を犯させるのです。

「あなたがたの神、主に従って歩み、主を恐れ」、「主の命令を守り、主の御声に聞き従い、主に仕え、主にすが」って、生けるまことの神の栄光を、神を知らぬこの暗黒の世に力強くあらわしていきましょう。